

## 2021 年度受賞者の受賞コメント

この度は京都大学久能賞という栄誉ある賞に選出して頂き、大変光栄に存じます。選考に関わってくださった皆様のご期待に応えられますよう、今後もより一層努力を重ねていく所存です。また、私のような学部生の志に対しても支援の手を差し延べてくださった久能悠子様へ深く感謝申し上げます。

私の目標は、医師としてまた医学研究者として臨床と基礎の両側面から、慢性疾患と闘う小児患者さんの苦しみを可能な限り軽減することです。私は6歳のときにランゲルハンス細胞組織球症(LCH)という小児慢性特定疾患である免疫疾患を発症し、以降12歳まで入退院を繰り返し様々な治療法を試しながら闘病生活を送りました。その期間を経て私は、からだところの発達に重要な時期にあるこどもが、長期間、病院という閉鎖的な空間で治療を受けるということがいかに特殊でつらいことなのか、そして家族へどれほど負担をかけてしまうことであるかを身を以て体験しました。この経験から、自分と似た境遇にある小児患者さん、そしてその家族の力になりたいという思いを強く持ち医学を志しました。臨床と基礎研究を両輪としたアプローチを通じて小児医療に最大限の尽力をしたいと考えています。

臨床では、こどもが同世代の友人や親以外の大人との関わりを通じて促される発達を重視し、疾患の治療のみに留まらない全人的な治療環境の構築の意義を検討し普及したいと考えています。慢性疾患の小児患者さんが置かれる特殊な状況のひとつに、治療への専念のため地域の学校に通えずそこでの友人や先生とのコミュニケーションの機会が失われてしまうことがあります。日本、あるいは世界の一部の病院では、院内学級が設置されていたり、チャイルド・ライフ・スペシャリストと呼ばれる専門職の方がいらっしゃるおかげでこころの発達が支援されていますが、そのような制度は未だに広く行き届いていないのが現状です。私はこの点を課題に設定し、小児患者さんの治療環境におけるこころの発達の重要性を疫学調査により検討し、解決策を構築し普及したいと考えています。

また基礎研究では、機序が解明されておらず治療法が確立されていない慢性疾患の病態究明を進めていきたいと考えています。罹患者が少ない希少性の疾患を初めとして、多くの難病の病態は未だ究明の途上にあり、現代の医療では太刀打ちできず長期間苦しみ続けなければいけない患者さんは沢山いらっしゃいます。このような現状を改善するために、私は難病の病態モデルの構築、更にもそのモデルを用いた治療法の開発に興味を持ち一年次よりiPS細胞研究所を初めとする様々な研究室で多種多様な手法を学びました。これまでの学びを活かし今後はマウスを病態モデルとして用いた免疫疾患の研究に励みたいと考えています。

今後の活動といたしまして、賜りました支援を励みに、これまでの小児病棟見学、基礎研究活動に引き続いて、日本そして世界の臨床と基礎研究の現場で医療を学び、未来の小児医療の発展に尽力していく所存です。この度は、ご支援頂き誠にありがとうございました。